

---

# 東方生活録

幻想郷の住人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方生活録

### 【Nコード】

N1395U

### 【作者名】

幻想郷の住人

### 【あらすじ】

#### 【修正中】 【工事中】

記憶を少し(?)失い、幻想郷と呼ばれる場所に堕ちてきた男がいた。

彼の名前は風戸 響介。

これは記憶を取り戻しながら幻想郷での生活を楽しむ・・・そんな



## 第1話 墜ちてきた男

日常は同じ事の繰り返しだと俺は思う。

朝に起きて、朝飯食べたら、学校へ行き、授業を受けて、家に帰る。

それから夕飯を食べて、風呂に入り、勉強してから、布団で寝る。

そして朝になれば、同じ事の繰り返し。

俺はそんな毎日を過ごしていた。

そしてある日の夕方……。

「ふう……授業も終わったし帰ろう。……それにしても”奴ら”には会いたくないなあ……」

俺はホームルームも終わり学校を出る。

そして山が綺麗に見える家路についた。

この後もいつもと同じ日常を過ごすはずだった……。

「う……痛たた……」

俺は気がつくとも知らぬ場所に居た。

周りには木が生い茂っていた……森なのかな？

体が結構痛い……まるで高いところから落ちた感じだ。

上を見ると崖があった。

そしてさらに上を見ると空が赤く染まっていた。

おそらくあそこの崖から落ちたのだろう。

「何で俺はこんな所に……うーん……」

俺はここに居る理由を思い出そうとした。

しかし学校から出たところまでしか思い出せなかった。

まるで記憶に霧がかかったように。

「どつやら記憶喪失というやつらしいな……とりあえず今ある情報をまとめてみよう」

俺の名前はかざと風戸 きょうすけ響介。

普通の一般人だ。

ズキッ!!

「痛っ……」

なんか”普通の一般人”って考えたら頭痛が走った。

理由は知らない……俺は多分、普通じゃないのかな？

で、他は……特に無いなあ……。

あえて言うなら記憶のところどころに獣と人間のハーフみたいながいるぐらい……。

小さい時に遊んでもらった記憶がある。

「え〜っと……どうしようか……」

俺は頭を触った。

すると手に何かついた。

手の平を見ると……少量ながら血がついていた。

「やばいな……。とりあえず治療しないと……」

俺はふらふらしながら立ち上がった。

そしてあても無く歩きだした。

俺はふらふらしながら歩き続けた結果、やっと森を抜けた。

空を見ると色は余り変わっていない。

どうやら大した時間は歩いてないようだ。

視線を前に向けると目の前には草原が広がっていた。

「痛たたた……。かなりやばいんじゃない……かな？」

俺の視界はぼやけてきた。

しかもさっきよりふらふらしてきている。

なんとか体勢を維持しながら向こうを見た。

視界がぼやけているため、確証は無いが里のようなものが見る。

距離は数十メートル。

普通なら歩ける距離なのだが、今の俺には歩けない。



歩くどころか踏み出せないのだ。

そして体に入らなくなりうつぶせに倒れた。

「ははは……これ、夢だといいなあ………」

ここで俺の意識は途切れた。

そして気がつくとなんは仰向けになつて天井をみていた。

多分、本日二回目の目覚めだ。

「……………あ、あれ？……………生きてる……………のか？」

俺は体を起こし自らの頬をつねった。

「痛っ！」

痛かつた……といふことは夢では無いようだ。

「ん？じゃあ気絶までが夢なのか？……………うん……………」

今度は頭をさすった。

頭には包帯が巻かれていた。

推測だが気絶までも夢では無いのだろう。

「しかし夢では無いのなら……………ここはどこだ？」

周りを見渡すと襖、床を見ると畳、そして俺は布団に寝かされている。

「きつと……………どこかの家なのかな？……………ここの人があるまで狸寝入りでも……………してようかな」

人の家を歩きまわるのは、さすがに気が引けるので布団で待つことにした。

しかしその前に襖が開いた。

「お目覚めのようね。気分はどうかしら？」

現れた人は銀色の髪をした医者のような人だ。

「どうやらこここの家の人らしい。」

「ええ、とここでここはどこですか？」

「ここは迷いの竹林にある永遠亭よ。診療所でもあるわ」

優しそうな人だなと思った。

「痛たた……。えっと……。名前は？」

俺はゆっくりと体を起こしてから名前を聞いた。

すると笑顔で、

「私は八意 永琳。ここで医者をしているわ」

と自己紹介をしてきた。

「でも……。なんで俺は竹林にいるんですか？里の方で倒れたはず  
……………」

素朴な質問をぶつけた。

まあ……きつと永遠亭まで誰かが運んでくれたのだと思っていた。

しかし返ってきた返事は少し違かった。

「え？そうなの？聞いた話によると竹林の前で倒れてたらしいけど……」

あれ？なんか誤差があるようだな……。

「うーん……。おかしいな……。痛っ！」

俺は記憶と証言の誤差を修正しようと記憶を遡った。

しかし思い出そうとすると少し強めの頭痛がした。

しかしそれは一瞬ですぐに治った。

「まあ今日はゆっくりしていくといいわ。今日はもう暗いしね」

永琳さんがそう言ってくれた。

「ん……わかりました。お言葉に甘えさせてもらいます」

今日は永遠亭に泊まる事になった。

「ご飯は後で鈴仙……私の助手が持ってくるからよろしくね」

永琳さんはそれだけ言つと部屋から出ていった。

「……さてと、安静にしておくのでしょうか」

俺は寝転がった。

そして天井を見ながら頭の中で色々考える、

( 一体……俺は何者なんだろうな…… )

普通の人間とか考えると頭痛が走る。

記憶の所々で出てくる人と獣のハーフの女性。

過去に一体何があったのだろうか……。

しかし今の俺には到底、答えは導き出せない。

「はぁ………時間を掛けてでも思い出していくしか無いかな？」

こう呟いた時、襖が開いた。

「おじゃまします……。食事を持って来ました」

兎耳を生やしてブレザーを着た女性だった。

どうやら永琳さんの助手のようだ。

「ありがとう。よいつ………しゅつと」

俺は体を起こした。

「余り無理しないで下さいね？」

女性は夕飯をおいて隣に座った。

「ああ、可能な限り無理はしないさ。……えっと、名前を聞かせて貰っても良いかな？」

「私の名前は”鈴仙・優曇華院・イナバ”。呼ぶ時は気軽に鈴仙でいいです。」

鈴仙はそう自己紹介した。

それにしても……瞳が赤い。

(この眼を見てると……何か思い出しそうだ。赤い瞳……赤い瞳……)

俺はそう思い、考え込んだ。

「あの……大丈夫ですか？」

鈴仙が心配そうに話しかけてきた。

「ん……大丈夫。少し考え事してただけだから」

「なら良かったです。夕飯は一人で食べれますか？」

「ああ……小さくてもいいから机を用意して欲しいな。膝の上は零しそつで怖いからね」

俺は笑顔で鈴仙にそう言う。

すると鈴仙はすぐに机を持ってきてくれた。

「ありがとう。助かるよ」

「それでは失礼します」

鈴仙は部屋から出ていった。

「赤い瞳…か。なんか引つ掛かるんだよな……」

頑張っと思いつくそうとするが何も思いつけない。

「とりあえず頑張っと思いつく…。うん……」

俺はまた考え始めた。

しかしその直後、

グウ~~~~。

腹の虫が鳴った。

「よし。食べてから思いつく」

俺は夕飯にがつついた。

病院の料理って余り美味しくなさそうなイメージがあったが、ここは違った。

メチャクチャ美味い。

これ以外では表現出来ない。

なので綺麗サツパリ完食した。



## 第2話 記憶の鍵探し

「……………ん？朝か……………」

結局昨日は何も思い出せなかった。

理由は考え込んでるうちに寝てしまったからだ。

本当につつかりしてしまった……………。

だが怪我は治ったので俺は退院（？）することになった。

余り長く居座るのも迷惑かと思い、逃げだそうとしたのだが永琳さんに止められた。

「せめて朝ご飯ぐらい食べて行きなさい」

どうやら朝ご飯を食べないと出れないらしい。

なので俺は朝食を食べる事になった。

朝食を食べて今は外に居る。

「それじゃあ道中気をつけてね」

「お世話になりました」

俺は永琳さんに見送られて迷いの竹林を後にした。

俺は自らの記憶と証言の誤差を修正するために今、自らが倒れた場所を探している。

「確か昨日はここら辺で……ん？これかな？」

不確定だが見つけた。

地面に血がついていたから発見は簡単なのだが……俺のかどうかはわからないのでどうしようもない。

「人里に向かってみよう。何かわかるかもしれない……」

俺は人里に向かって歩き出した。

人里の入り口の前に到着した。

外から見た大通りは中々活気があった。

「ここか……中々賑やかじゃないか」

「おや？見かけない顔だな。何者だ？」

長髪の女性が話しかけてきた。

「えっと……普通の人間です？多分。痛っ……」

また頭痛がした。

「何だ？自分が何者かもわからないのか？」

「まあ……記憶喪失というやつです」

「しかしすぐに里に入れる訳には行かない。君からは膨大な妖力を感じるからな」

そんな簡単に入れてもらえないようだ。

つて妖力？

また何か引つ掛かる……。

「妖力？……確か数百年前、首筋の辺りに……。あれ？何かあったっけ？」

俺は自分でもわからない事を言った。

しかも数百年前って……人間の寿命は百年程度じゃなかったっけ？

「首？少し後ろを向いてみる」

「は、はい」

俺は後ろを向いた。

「……ん？これは……刻印か」

「刻印？……なんか色々引っかかるな……」

どうやらここには俺の記憶を取り戻す鍵がありそうだな……。

「……君。少し待っていてくれないか？」

「？……わかりました」

女性は里の方へ走っていった。

しばらくして女性は新たな女性を連れて戻ってきた。

うくん……永琳さんや鈴仙もそうだが美人多すぎだろ……。

「待たせてすまないな」

「いえ、大丈夫です。ところで……その方は？」

連れてきた女性は日傘をさしていて扇子を持っていた。

「私は八雲 紫。幻想郷の管理者よ。よろしくね」

「風戸 響介です」

つて幻想郷？

なにそれ？

とりあえず後で聞いてみようっと。

自己紹介をすると女性が紫さんに話しかけた。

「紫。ここは任せていいか？私は寺子屋で授業をしないとイケないから……」

「ええ。構わないわ」

「それじゃ、失礼する」

女性は走っていった。

「それじゃ、後ろ向いてちょうだい」

「また……わかりました」

また後ろを向いた。

何回後ろを向くことになるのだろうか……。

「なるほど……。まだ目覚めていないようね……。でも膨大な妖力が漏れ出ているわ……」

「?……何を言ってるんですか?」

「いえ、何でもないわ。そんなことより貴方……妖力にくわえて魔力や霊力まで持ち合わせているなんて……」

なんか深刻な表情してるぞ?

何故?

「いや……俺に聞かれてもわかりませんよ……」

「そう……。とりあえず荷物だけ確認させて?」

荷物？そんなものは無いよな……………。

俺はとりあえずポケットを漁った。

すると手に何か当たった。

「何だ？これ……………宝石？」

ポケットから取り出したものは真紅のルビー。

よく見るとルビーの中に黒い蛇のようなものがあつた。

紫さんは宝石を見た途端、顔を宝石に近づけた。

「これよ！……………やはりこつちもまだ目覚めてないようね……………」

「……………？」

なんか色々忙しい人なのかな？

「あとは靈力なんだけど……………何か心あたりは無い？」

「記憶喪失の俺に言われても困ります……………」

そう言いつつも思い出そうと頑張ってみた。

しかしやはり記憶に霧がかかっけていて思い出せない。

その時、頭の中に一筋の光が見えた。

そして記憶の中の一部の靄が晴れた。

「ん？……ああ、そういうことか……」

「ん？どうしたの？なにかわかったのかしら？」

「まあ少しだけ……。でも話したくないです……」

俺は先に話すことを拒否した。

こんな普通の人間には関係ないし、関わらせたくない。

「……そう。話せるようになったら話してちょうだいね」

「すみません……。わがまま聞いてもらって」

「気にしないでいいわよ。誰しも話したくない事はあるものね」

紫さんは俺の肩を持った。

優しい人だな……。紫さんって。

「それじゃあ……。失礼します」

「機会があつたらまた会いましょうね」

「また……。いつか」

俺と紫さんと別れた。



人里を離れて今は草原の中を歩いている。

「あ、幻想郷について聞くの忘れた。……まあ今度聞くとしようか……」

その時、激しい頭痛を俺を襲った。

「ぐっ……うあああああああああああ……！」

頭が割れるような痛みだ。

その痛みはさらに増していく。

「ち……畜生……」

俺は何とか見つからないために背丈の高い草が多く生えている場所

に倒れる。

「いったい……なんだって言うんだよ……」

俺の意識は痛みによって朦朧としてきた。

そして意識がとて深い闇に落ちていった。

深い闇の中をさまよいやつと出てみると周りは草だらけだった。

「そつえば……隠れてたんだよな……」

俺は立ち上がった。

そして周りを見るとすっかり夜になっていた。

「満月か……とりあえず……すぐ近くに川があるみたいだから顔を

洗おうかな……」

俺はゆっくり歩き出した。

川に着くと水面が綺麗に輝いていた。

俺は顔を洗うために水面に屈み込んだ。

すると俺はひとつ異変に気がついた。

「さて顔を洗うとしよう……ん？左目が赤くなってる……」

そう。左目が真っ赤なのだ。

充血してるわけでは無く、瞳が赤に染まっている。

(治る……よね?)

そう思いながら顔を洗った。

「はあっ……すっきりした。…しかし目は治らないか………」

俺は立ち上がった。

そして振り向くと

「……………」

金髪の女の子がいた。

「こんな時間に出歩くななんて危ないから帰りな。送ってあげるからね」

「……………貴方は食べてもいい人類？」

「いや、食べれないと思うよ？」

俺は小さい子供だと思っていた。

「そーなのかー」

「そーなのだー」

だってこんな会話してたら普通はそうなると思う。

「ほら、里ならあっちにあるから帰るといい」

「私……人間じゃないの……じつは妖怪なの」

「へえ……そうなんだ」

俺はただの冗談だと思い、軽く受け流した。

しかしここからはまったく冗談とは思えない事が起こった。

### 第3話 能力の開花

「……………うん。だから貴方を……………食べるわ」

金髪の少女から何か強い力を感じた。

覇気のようなものではなく、恐怖を煽る感じの力だ。

「くっ！？な…なんだ？この感じ……………」

「それじゃ……………いただきます」

俺が僅かながら恐怖を感じた瞬間、少女は俺に迫ってきた。

しかも浮きながら。

「危なっ！！！」

俺は回避行動した。

しかし避けきれずに少女の爪が俺の腕を掠る。

服が破れ、血が出る。

「まさか本当に……………妖怪……………なのか？」

俺は信じられなかった。

こんな可愛い子が妖怪だなんて……………。

「よく避けたわね……。でも次は逃さない……………」

少女はまた向かってきた。

俺は何とか避けようとするが……………

「くうっ!？」

避けきれずに腹の部分の服が切り裂かれた。

激しい痛みが俺を襲った。

俺は地面につづくまる。

「……………」

少女はトドメをさすためにゆっくりと近づいてくる。

「はぁ……………はぁ……………」

俺はゆっくりと立ち上がった。

「まだ……………立てたのね……………」

「俺は……………まだ……………死ぬわけにはいかないんで……………」

「へえ……………でも貴方はただの人間。私は妖怪。勝てるわけがないわ」

確かに彼女の言う通りだ。

勝ち目は0に等しい。

それなのに人里に逃げずに俺は少女と向き合っている。

「なんでだろうね……恐怖は感じるけど……逃げるって答えが出ない」

「そうね……今まで襲った人間は皆、逃げていったわ……でも貴方は逃げてない」

「多分……逃げる必要が無いから……かな？」

「その余裕……どこから出てきてるかわからないけど……粉々にしてあげるわ!!」

少女はさっきより速いスピードで迫ってきた。

俺はそんな中で頭の中に誰かの声が響く。

(伏せろ!!!)

「え?誰!?!」

(いいから早く!!!)

「あ、ああ!!!」

俺は素早い動きで伏せた。



伏せたら少女の攻撃を完璧に避けることが出来た。

「誰の声だ？……どっかで聞いた事があるような……」

（はぁ……久々に起きてみたら危ないところだった……全く……お主は何をしとるんだ！！）

頭の中で誰かに怒られた。

「す、すいません！！……ってだから誰？」

（なんだ……忘れたのか？僕は銀狼。お主の刻印に宿る妖怪だ）

銀狼と名前を聞いた途端、頭の中の一部な靄が取れた。

「銀狼……確か数百年前に……”あの人”から貰った妖怪……」

俺は思い出した事を呟いた。

そんな時、少女がゆっくりと俺に向かって歩いてきた。

「誰と話してるの……ってなんで人間にこんなに妖力があるの！？」

「ん？妖力？……確か紫さんがそんな事を言ってたな……」

（しかしお主……何故こんなに弱いんだ？以前はあんなに強かったのに……）

「記憶喪失というやつでな……昔の記憶とか無いんだ」

もし、そんなに強いなら身体が勝手に動いてもいいはず……。

全く……中途半端な記憶喪失だな。

「あ、そういえば名前聞いてなかったな。君の名前を教えてくださいな  
いか?」

「ルーミアよ」

「ルーミアか……よろしくな」

「……どうして貴方はそんなに余裕なの!? さっきまで私に食べられそうになってたのよ!」

「ん〜……なんでだろ?」

余裕な理由は俺が一番知りたい。

自分でもわからない余裕ってなんだよ……。

「なっ!?!」

「まあ、何とかなると思ったんじゃない?」

(まあお主の本来の力は強力だからな……)

「へえ……そうなんだ」

「もう良いわ!! 絶対にその余裕ごと食べるから!」

かなり苛立ってるようだ。

何か悪い事でもしたかな？

「銀狼……戦いのサポートを頼む。俺本来の力とやらを引き出す為  
に」

（よからう。協力する）

「行くわよ!!」

ルーミアは闇の剣を作りだし、迫ってくる。

「銀狼!!どうすればいい!?!」

（とりあえず”武器を出したい”と念じる）

「あ、ああ!!」

（そして叫べ!!”星穿ほしうぎの神槍しんそう”と!!）

「星穿の神槍!!」

俺は銀狼に言われるまま、そう叫んだ。

すると目の前に槍が現れた。

棒の上下に両刃が付いた槍だ。

俺は星穿の神槍を掴み、ルーミアの剣を受け止める。

「貴方……本当に人間なの？」

「……人間じゃない。だが妖怪でもない。……それだけは確かだ」

（うむ……今のお主の姿は本当の姿では無いからな……）

どうやら銀狼は本当の俺を知ってるみたいだ。

あとで聞いてみよう。

「はあっ！…！」

とりあえず俺はルーミアと距離をとった。

「なあ……遠距離武器は無いのか？」

（あるにはあるが……捕縛技だぞ？）

「それでも良いからさ。教えてくれよ」

（わかった。あ、あとお主の技は基本的に念じる事で発動出来る）

「わかった」

（よし、”動きを封じたい”と念じる。これで封じれる）

「喰らいなさい…！」

ルーミアは闇の剣を振り下ろしてきた。

「おっと……はっ!!」

「きゃっ!?!」

俺は回避してルーミアの動きを封じた。

自らの手を見ると緑色に輝いていた。

ルーミアのからだの周りにも緑色の幕がある。

これを見た途端、頭痛がして何か言葉が蘇った。

「痛っ……。念……動……力……?」

(そう。念動力。お主の能力の名前だ)

「へえ……なるほど。理解した」

(で、拘束したのはいいがこの後はどうするんだ?)

「そっだな。……」

俺は考えた。

投げ飛ばす?叩きつける?回す?

なんとなくだがどれも面白くない。

「放してよ!!」

ルーミアは身体を動かさずにいる。

「そうだ。ならばこうしよう」

「ひゃっー!!」

俺は念じてルーミアの上下を入れ替えた。

スカートは念動力で押さえてあるから問題ない。

「さて……どうしようか」

「戻してよー!!」

「あと少ししたらな」

(何をやる気なのだ?)

銀狼がそう尋ねてきた。

「ふふふ……飛ばすだけだ」

「え? ちょっと?」

「しかもただ飛ばすのでは芸が無い。回しながら飛ばす」

「やめてえー!!」

ルーミアが必死の抵抗をするが、無視。

「んじゃ、またな」

「きゃあああああ！？」

俺はルーミアをこまのように回転させながら空高く飛ばした。

速度は中々で、綺麗な放物線を描いて山に落ちていった。

「ふう……一時はどうなるかと思った」

(全くだ。とりあえずお主は頑張って記憶を取り戻すのだ。わかったか？)

銀狼はそう言った。

「……うん。頑張る」

俺はその銀狼の言葉を曖昧に答えた。

(それでは僕は少し寝る)

「おやすみ。またよろしくな」

(ああ……おやすみ)

ここで銀狼の声が聞こえなくなった。

「はあ……とりあえず寝ようかな？結構疲れたし………」

俺はその場で寝ようと寝転がった。

そして眠りにつこうとする。

しかしその前に一つ、重大なミスに気がついた。

「銀狼に記憶について聞くの忘れてた……」

俺は失敗を少し悔やみながら眠りについた。



## 第4話 新たな仲間

気がつくと日が昇っていた。

「……………ん、朝か……………」

俺は身体を起こして伸びをした。

そして傷を見るため視線を下に向けた。

しかしまた異変があった。

「昨日の傷大丈夫かな？……………あれ？傷が……………無い」

傷が綺麗サツパリ消えているのだ。

服は破けているものの、身体に傷跡は全く無い。

そして頭の中に一つの単語が浮かんだ。

「……………自己再生？再生速度、早過ぎないか？」

俺は疑問を持ったが、それを否定する言葉が見つからなかった。

「まあ……………便利だから良いか……………とりあえず今日は歩いて付近を探索してみよう」

俺は気を取り直して周辺を歩き出した。

人里を少し離れ、初めて目が覚めた森の中へと入った。

ここに来た理由……それは

「なんか鞆とか無いのかな？」

ただ忘れ物が無いか探すためだ。

もし忘れ物があったら記憶を取り戻すきっかけになるかもしれない。

そう思って実行しているのだ。

「まあ、探す範囲も小さいから楽し……」

俺はそのまましばらく探していた。

今はちょうど日が真上に見える時間帯だ。

俺はあれからしばらくは、諦めなかった。

しかしその努力は実らず、記憶に引っ掛かる物は見つからなかった。

あるのは犬か何かの埋めた骨、茸、木の実ぐらいだ。

「はあ……結局何も見つからないのか……ん？あれってもしかして……」

俺は諦めて地面に仰向けになった。

そして上を見ると鞆らしきものが枝に引っ掛かっていたのだ。

しかしその枝が高いところにある。

高さをわかりやすく言つたら俺の身長（173cm）の約3倍だ。

「こつこつ時はどうするか……」

俺は考え込んだ。

自らの3倍の高さにある物を取る方法を見つけるために。

そしてすぐに見つかった。

「……念動力か」

そう、念動力。

念じれば簡単に使える技で、効果はルーミアで実証済み。  
ならば使おうじゃないか！

俺は鞆に向かって手を翳して念じた。

）”あの高いところにある鞆を取りたい”（

そう念じると手が緑色に輝き、鞆のふちも輝いた。

そして鞆が枝から外れて俺の元へ来た。

「……………思い出せない記憶に関する事があると良いな……………」

俺はそう呟き、鞆を開けた。

すると中から何かが飛び出してきた！！

しかしその何かは攻撃するわけではなく、俺に擦り寄ってきた。

「くすぐつたいな……………ん？黽？つて確か…水……………姫？」

俺は靄のかかった記憶の一部が晴れるのを感じた。

この黽は水姫。

俺のペットだ。

以前に怪我していた水姫を保護して、看病したところ……凄く懐か  
れた。

そんな記憶が蘇った。

しかし水姫はそんな俺を余所に、どこかへと走っていった。

そんな時、俺は一つの案を思いついたのだが……

「ん？もしかして水姫に聞けば何かわかるんじゃないか？……まあ  
無理か」

あまりにも非現実のため、すぐに諦めた。

そしてほかに何か良い案は無いかと悩んでいた時、

「普通に話せるでございませすよ？主<sup>ぬし</sup>」

後ろから女性の声が聞こえた。

「え？誰？」

俺が振り向くと黒髪でポニーテール、変わった和服を着た人がいた。

ついでにかなりのナイスバディと言える。

そしてその女性は驚きの一言を言った。

「私ですよ。私。水姫でございませす」

「み……水姫い!？」

俺はあまりの変わりように大声を出してしまった。

「お前……何があつた？」

「何があつたつて……ただ人間の姿になっただけでござんす」

水姫の敬語……何かおかしいな……。

しかしこの喋り方を聞いていると何故かリラックス出来る。

つと……その前に確認しないとな。

「もしかして水姫つて……妖怪だったのか？」

「一応ですけどね。ちなみにこの姿になつたのは貴方に初めて会う前以来です」

「妖怪か……特に気にしないけどさ。記憶が戻るまで、サポートを頼む」

「かしこまっちゃいました。主」

そついうわけで水姫が仲間になった。

「うん……特に無いなあ……」

水姫が仲間になった後、俺は鞆を漁った。

しかし特に良い物は見つからなかった。

残る手がかりは……

「どうかしやがりましたか？主」

水姫だな。

「なあ、水姫。何か俺に関する情報とか無いか？」

「そうですね……私ができるのは……許婚がいる事ぐらいです」

「許婚？……確か名前は……思い出せない……痛っ」

俺は記憶の霧の中を必死になって探した。

姿は見えたが名前が出てこない。

しかも何故か頭痛がした。

どうやら許婚は思い出したくない記憶に関わっているらしいな……。

「なるほどな……。他には何かあるか？」

「……申し訳なかくです。私はもう知らんの事ですたい」

「わかった。まあ記憶の手がかりが見つかったから良いさ」

俺は優しく水姫にむかってそう言った。

「お役に立てたならよかったです」

水姫は笑顔で言った。

俺はこの笑顔を見て、

(これ、絶対美女と呼べる笑顔だな……)

と思った。

だってかなり輝いているんだから。

……おっと、話がずれた。

まあ手がかりが見つかったわけだし、今日はぐっすり寝れそうだな。

「さてと、家に帰……………あっ」

しかし俺は結構、重大な事に気がついた。

「どうしやがりましたか？」



「俺……家持ってないんだっ」

そう。家を持ってない事だ。

思い出せば、初日は永遠亭、二日目は野宿だった。

(どうにかして雨風凌げる場所を探すか作らないと……)

俺は雨風を凌ぐ方法を考え始めた。

すると頭の中の霧の一部が晴れた。

そして方法が導き出された。

「……どうするんですか？」

「よし、水姫。こちら辺の良質な木を切って綺麗な丸太を作ってくれ。数は……三十本ぐらいで頼む」

「……はい。かしこまっちゃいました。『双牙』」

俺は流石に無理かな？と思ったが、水姫は『双牙』と呼ぶ二本の小刀を取りだし、構えた。

「主、離れてて下さい。危ないので」

「あ、ああ」

俺はそのまま下がり、待機した。

「行きます……『迅雷・時雨の型』」

「っ!？」

一瞬、視界が光に包まれ何も見えなくなった。

そして光が消え、水姫の方を見ると刀をしまっている。

「水姫？何故刀を……」

俺は疑問をぶつけようとした。

しかし言い終わる前に水姫が

「主、木が倒れて来やがりますよ？しっかりと受けとって下さいね」

と言ったので俺は周りを見た。

すると、ギシギシと音を立てて木々が倒れてきた。

しかも全部、俺に向かって。

「くっ!!人使い荒いなあ!!」

俺は手を倒れてくる木々に向かって両手を翳す。

そして念じた。

(俺に向かって倒れてくる木々を止めたい)

すると木々はすべて止まった。

俺はそのまま木々を移動させた。

「やっぱりお見事でしちゃいますな。主は」

「ったく……危ないっての。まあ……良しさ。これで簡単な家が作れる」

俺は簡易的だが、実用的な（はずの）家を作り始めた。

まあ、いわゆるログハウスみたいなやつだ。

以前に何故かわからないが作った記憶があった。

本当なら時間をかけて木を乾かさないと駄目なのだが、企業機密の方法を使って作っている。

「水姫。ここをくり抜いてくれ」

「了解でしちやいます。主」

水姫が器用なおかげで進行速度は速いし……今日はなんとかかなりそ  
うだ。

俺はそのまま組み立て始めた。

そして気がつくとき夜の帳が下りていた。

「ふう……とりあえず完成。中々の出来栄だ」

水姫は扉を開けて中を確認した。

「部屋までありやがるんですね……まさかの裏口までも……」

「まあ簡易的だが、問題は無いだろ？」

「あとは夕飯ですね。主は朝と昼を抜いていると思われちゃいますので、さっさと作ります。っていうか、もう出来てます」

水姫は川の方へ走って行った。

「ん？ああ、そうか。悪いな……。それより……なんでもう出来るんだ？」

俺はその後を疑問を持ちながら歩いてついていった。

ちなみに、川は家の目と鼻の先。

つてか家の裏口を開けたら、目の前だ。

人里も近いし、利便性重視だね。

## 第5話 巫女と魔法使い

「……………ん？……………もう朝か……………」

俺は窓から差し込む朝日で目が覚めた。

ゆっくりと体を起こし、伸びをする。

「水姫は……………河原かな？」

俺は布団を片付けて、家の裏口から外に出た。

外に出て深呼吸をし、山の綺麗な空気を体内に取り込みながら歩いた。

「はあ……目が覚めたな。あ、水姫だ」

そして河原に着くと水姫は魚を焼いて、飯盒でご飯を炊いていた。

「おはようございますです。主」

「ああ、おはよう」

お互いに挨拶を交わして、俺は椅子（丸太）の上に座った。

「はい、主。イワナの塩焼きと白米です」

水姫は魚と木の器に盛ったご飯を渡してくれた。

「お、ありがとう。……いただきます」

「召し上がれます」

俺と水姫は朝食を食べ始めた。

「うーん……どうしようかな……」

「どうかされたのでございますか？」

「いや、ただ今日の予定を決めてないから悩んでいただけだ」

そう。予定が全くないのだ。

里に行くわけにも行かず、他に行く場所も無いし……

「なら、博麗神社に行くのはどうでしょう？」

「博麗神社？どんな場所なんだ？」

「人里の向こうの山の上にある神社で、そこには妖怪退治のプロがいるみたいです」

俺はここでちょっとした疑問がうまれた。

「……ってか水姫？なんで場所とか名称がわかるんだ？」

「……秘密でございます」

笑顔で言われた。

でも気になる。

しかし俺は詮索するのをやめた。



理由は簡単。

世の中には不可侵領域フライバシーがあるからだ。

踏み込んではいけないうところに踏み込んでしまえば、必ずと言っていい程に争いが起こる。

俺はそういう光景を何度も見た気がするから、詮索をあまりしない。

まあ詮索をあまりしないおかげで争いに巻き込まれにくいんだけど……。

そんなわけで俺は無駄な詮索をしないのだ。

「よし、今日は色々な場所を回ってみよう」

「かしこまっちゃいました。主」

予定決定。

俺は朝食を食べて、支度した。

今、神社へと向かう階段を登っている。

しかしその階段が結構長い。

「はあ……はあ……」

俺は息を切らしながら階段を登っていて、

「主。もう少しですから頑張ってくださいませ」

水姫は余裕そうに階段を素早く登っていた。

俺は一回止まり、呟いた。

「空でも飛べたら良いなあ……」

そしたら水姫が提案してきた。

「念で自分を浮かせば良いんじゃないですか？」

「……あ、その手があった」

なんで気づかなかったんだ？俺……。

そんな自分が悲しい……。

「よし、やってみるとするか」

俺は自分が空を飛ぶ事を念じた。

するとゆっくりと綺麗に浮いた。

「おお、うまくいったな」

「早く登りきりましょう。主」

「おう。わかった」

俺と水姫は博麗神社目指して、少しながら加速しつつ登った。

「よっ……と。到着か？」

俺は境内に降りて周りを見た。

「そのようどじやいますすな」

水姫も境内に降り立つ。

境内は綺麗に清掃されていて、中々良い印象を持てた。

(中々平穩そつな場所だな……)

と思ったのはつかの間、

ズガガガガアアアアア！

左から巨大なレーザーが飛んできたのだ！！

「ん？何の音だ……ってうおおお！？」

「おとととと、一旦下がりますです」

俺は慌てながら、水姫は落ち着いて下がった。

その直後、俺達のいた場所にはクレーターのよつな跡が残っていた。

「危ねえ……いつたい何なんだよ……」

「主。あちらの方で何か騒がしいのです。行ってみましょう」

水姫が神社の横を指さした。

そこを見ると何か戦っているよつな光が見えた。

「ああ、行ってみよつ」

何が起きているかが気になったのでこっそりと覗きに行った。

「こらー！！魔理沙！！神社を壊さないでよね！！」

「いやあ、悪い悪い。少し手が滑っちまったぜ」

俺と水姫が覗くと、黒と白の服をきた魔法使いらしき姿をした少女と、腋を露出した紅白巫女がいた。

「全く……狙うならしつかりと狙って撃ちなさいよね……」

「ははは。良くある事だ。気にしない、気にしない」

二人の少女は楽しそうな会話をしている。

しかし俺は考えていた。

あの魔理沙と呼ばれる魔法使い少女の事である。

(あんな少女がさっきのレーザーを放てるのか？いや、しかし……)

そんな時、水姫が話しかけてきた。

「あの方々はいったい何をしちゃっているのでしょうか？」

「さあ？俺に聞くなよ……」

俺達は静かに会話していたのだが……

「そこにいる妖怪二人組？出てきなさい！」

「いや、霊夢。多分片方は魔法使いじゃないか？かなり膨大な魔力を感じるぜ？」

何故かわからないがばれた。

「どうしますのか？主。出ますか？」

「……仕方あるまい。潔く姿を現すとしよう」

俺と水姫は恐る恐る二人の前に姿を現した。

「人の話を盗み聞きするなんて良い度胸してるわね……」

「そうだけ。それなりの覚悟があるんだよな？」

何か武器を構えて覚悟があるか聞かれてる。

「いや、覚悟も何も無い」

「その通りでござんす」

俺と水姫はとりあえず正直に答え、武器を取り出した。

「でもやる気はあるようね」

「まあ実力を見せて貰うとするぜー!!」

「水姫、前に出てくれ。援護する」

「かしこまっちゃいました」

こうして二人の少女との戦いが始まった。

しかしこの戦いは俺が予想も出来ないような戦いだった。

「いざ尋常に勝負!!」

俺と水姫は武器を構えて、魔法使い少女を狙った。

「先手必勝だぜ!!恋符『マスタースパーク』!!」

魔理沙と呼ばれる少女は紙のような物を構えた後、箱のような物を構えた。

するとその何かから極太レーザーが放たれた。

「危なっ!?!」

「はあっ!?!」

俺と水姫はそのレーザーを避けた。

「ったく……あの武装は危険だな……」

「どうします?主。対策方法とかありませんと……」

「ほら!相談する暇なんて無いわよ?霊符『夢想封印』!!」

今度は霊夢と呼ばれる少女が紙を構えて、巨大な弾を数発撃つてきた。

しかもその弾には強い追尾機能がある。

俺は身構えたが、また頭痛がした。

しかし今回の頭痛はいつもと違った。

「痛っ……何か頭の中に情報が入ってきた……」

「え？と、とりあえず避けましようよ？主！」

「仕方ない……水姫！」

「はい……」

俺と水姫は避けずに相手に突っ込んだ。

その俺達を追うように弾が追ってくる。

「なんだろうな……戦いが頭の中で構築されてる……。水姫、そこで加速だ」

「はい。加速しちゃいます……」

水姫は残像が出来るぐらいの速さで突っ込んだ。

この残像は特殊な質量を持ち、追尾機能を持つ攻撃は本体に追尾せずに質量を持った残像を追尾してしまう。



まあわかりやすく言うならF91のM・E・P・Eだ。

「夢想封印が当たらない!？」

「おゝ、中々の速さだな。しかしスピードなら負けないぜ!！」

「おっと、俺を忘れて貰っては困るな。……加速!！」

ちなみに俺の加速はただの加速だ。

俺は高速移動で魔法少女に突っ込んだ。

## 第6話 少女達との戦い

「返り討ちにしてやるぜ！！魔符『スターダストレヴァリエ』！！」

少女は箒に乗って突っ込んできた。

「少し誤差はあるが、問題無いな……。」  
「テレポート瞬間移動」

俺は瞬間移動で攻撃を避けた。

「ど、どこに行ったんだぜ？」

俺は少女の後ろに立ち、肩を叩いた。

「後ろだよ。後ろ」

「このお！！恋符……」

少女はまた箱のような物を構えた。

しかし俺はその前に少し話した。

「あ、そうそう。忘れてると思うけど、夢想封印は俺を追っている。そして君は俺の近くいる……これがどついう意味か分かるか？」

「ん……ま、まさか！？」

少女がそう言った時には、周りに夢想封印の弾があった。

そして弾が接近してきて、俺達を包み込んだ。

しかし俺は相打ちになるつもりは全く無い。

何故なら回避方法があるからである。

さっき弾が水姫の残像に当たって爆発していた光景を見て、思いついた方法だ。

その方法とは……

「じゃあな。『瞬間移動』!!」

そう、瞬間移動で爆発寸前に脱出するのだ。

「なっ!?!うわあああ!?!」

バアアアアン!!

夢想封印の弾は爆発した。

しかし巻き込まれたのは少女のみ。

これはいわゆる誤射というやつだ。

「ふう……うまくいったな。残るは……巫女さんか」

「よつと、流石ですな。主」

水姫が戻ってきた。

「まさか魔理沙がこんなに早くやられるなんて……」

ドサッ！

霊夢と呼ばれる少女がそう呟いた時に、魔法少女が落ちてきた。

「痛たた……負けちゃったぜ……」

少女の服は結構ボロボロだ。

「魔理沙……もっとしっかりしなさいよね」

「今日は良いところ無しだな……」

少女達は会話していた。

「さてと水姫。……巫女はどうだった？」

「手合わせしたのですが……かなり強いです」

「そうか……なら楽しめそうだな」

「主……なんか……さっきとキャラ変わってませんか？」

水姫にそんな事を言われた。

「ん？そうか？俺には分からないんだが……まあ、この話は後だ。今は、戦いに集中しろ」

「かしこまっちゃいました」

まあ話もそこそこにして武器を構えた。

すると巫女さんは札を構えて、俺に問い掛けた。

「ったく……貴方達は一体何者なの？」

「……自分でも分からない」

「へ？どういう事？」

「……まあそれは後で語るとしよう。……水姫、下がって魔法少女の怪我を治しておいてくれ」

「……了解です」

水姫は後ろに下がり、魔法少女を治療にいった。

ちなみに俺が水姫の治療能力を知っていた理由は、自分でもわからない。

多分記憶の中にあっただんだと思う。

本当に……中途半端な記憶喪失だな……。

「とりあえず……勝負を始めるわよ？」

「ああ、そのつもりだ」

俺がそう返答した途端、巫女さんは札を投げてきた。

俺はその中を避けながら接近して槍を取り出し、振りかぶった。

ガン！！

巫女さんの棒と俺の槍の柄がぶつかりあう。

それを数回繰り返した。

「中々やるわね。でも……」

「巫女さんもな。でも……」

「「そろそろ決着をつける！！」」

そしてお互いに言い放った後、距離を取って力を溜めて同時に技を仕掛けた。

しかし俺の場合は攻撃では無いけど……。

「『瞬間移動』」

「『霊符『夢想封印』！』」

俺はかなり上空に現れた。

そんな俺を追うように夢想封印が飛んでくる。

「さてと……久々にあの技をやるとしようか」

俺はまた自分でも分からない事を言った。

なんだか自分が分からなくなってきた気が……。

「究うう極うう！！ゲシュペンストオオオ！！」

「え！？急に何！？」

巫女さんは戸惑っていた。

まあ急に叫んだからだと思っう。

そんな事は放置して、また叫んだ。

「キイイイイイック！！」

蹴りの構えで俺は巫女さんに向かって落下した。

重力に引かれて徐々に加速していく。

落下していく中で脚の先端に特殊な障壁バリアが展開された。

どうやら今の俺が知らないシステムがあるようだ。

記憶喪失って本当にわかんないなあ……。

おっと話がずれた。

俺の蹴りは巫女さんに向かっていているのだが、その途中には夢想封印

の弾が数発壁になっている。

「自分からやられるつもりなの!?!」

「そんなつもりは無い。……さあ……貫くとしようか!?!」

夢想封印の弾に脚が衝突した。

パアアアン!!

すると蹴りは弾を打ち砕き、俺は突き進んだ。

それを夢想封印を全弾貫く。

「そんな!?!夢想封印が!?!」

「……これで決まりだあ!?!」

俺はさらに加速して巫女さんへと向かう。

ドガアアアア!!

「くうっ!?!」

そして巫女さんを貫いた。

「どんな壁も……蹴り破るのみ……」

なんか決め台詞のようなものを言ってしまった。



なんか癖なのかな？

「ふう……疲れた……」

「痛い……貴方、本当に強いわね……」

「今の俺はまだ完全じゃないけどな………水姫。そっちは終わったか？」

「はい、完全に終わっておりますたい」

「それじゃ、巫女さんの方も頼む」

「かしこまっちゃいました」

俺は水姫に巫女さんの治療を任せた。

「あ、待って」

しかし巫女さんに呼び止められた。

「何だ？」

「自己紹介がまだだったわね。私は博麗 霊夢。貴方は？」

「風戸 響介。多分人間。今は記憶喪失中だ」

「私は水姫。妖怪です」

「私は霧雨 魔理沙だぜ」

自己紹介を済ませたので俺は縁側に座った。

俺の隣に霊夢が座り、その隣には水姫、そしてさらにその隣に魔理沙が座った。

「さてと……霊夢。一つ聞いていいか？」

「何？」

「さっきの紙って何だ？」

「え？スペルカードを知らないの？」

どうやらさっきの紙はスペルカードと言つらしい。

あ、知らない理由を言わないとな。

「だって分からないも何も……………」

「つい最近、幻想郷に来たんだもの。知らなくて当然よ」

俺は理由を説明しようとしたら聞き覚えのある声が聞こえた。

つてか台詞取られた。

俺が振り向いたら、人里で会った紫さんが座っていた。

「ゆ、紫さん!？」

「人里以来ね。元気だった？」

「まあ色々ありましたけどね。……っつか敬語疲れる……」

「別に普段通りで構わないわよ？」

「ああ、なんか悪いな。我が儘聞いて貰って」

「大丈夫よ。気にしないで良いわ」

そんな感じで会話していると霊夢が話に乱入してきた。

「っつて響介。紫を知ってるの？」

「いや、人里で色々と世話になってさ。力が何とかって」

「……あの紫殿は妖怪でござんすか？」

水姫が紫に尋ねた。

「ええ。そうよ」

俺はこんな美人さんが妖怪だとは思わなかった。

世の中って意外と面白いよな……。

「紫もスペルカードを持つてるのか？」

「ええ、もちろん持つてるわ」

紫はスペルカードを取り出した。

「スペルカードについて説明してもらってもいいか？」

「構わないわよ。しっかりと聞きなさいね？」

「おう。わかった。……水姫もな」

「了解でありんす」

俺と水姫は紫や霊夢に説明して貰った。

弾幕ごっこやスペルカード、弾幕の出し方、そして幻想郷とは何か  
……………。

それらを聞いて俺は、

「色々複雑なんだなあ……………」

と思った。

## 第7話 霊・妖・魔・神

「説明はこれぐらいだけど、質問はあるかしら？」

と紫が扇子を持ちながら言った。

「無い」

「無いです」

俺と水姫は一言で返事を済ませた。

「……俺からも以前話せなかった事を話すとして。紫なら覚えて  
いるだろう？」

「ええ。もちろんよ」

「それじゃあ一言で済ませるとしよう。俺は………人間でも妖怪  
でもない」

「え！？」

「ん？どついう事だ？」

「いや、聞いた通りでしょ」

水姫を除いて紫は驚き、魔理沙は理解出来ず、霊夢は突っ込んでい  
た。

まあさつき紫の説明だと幻想郷にいるのは”人間””妖怪””妖精””魔法使い””天人”……………色々らしい。

しかし俺の記憶にはどの言葉もピンと来なかった。

”化け物”の方がピンと来る…………。

全く…………俺は何なんだろうね？

「そしてもう一つ。霊力についてだが…………多分、俺が霊力を持つ何かを取り込んでるんだと思う」

「取り込んだ？一体何を？」

霊夢が尋ねてきた。

「…………まだそこはわからない。しかし何かを取り込んだのは事実だ」

「でも…………取り込むってどうやって？」

「ん…………食べた？…………いや、”助けるために食べた”の方が正解か」

「助けたってどういう…………」

「それは色々と思い出してからだな。まだ不確定な事が多いし…………」

俺は話を打ち切った。

これ以上は、話してもわからないからな。

「……わかったわ。色々調べるのに使わせてもらっわね」

「ああ、了……………え？調べるって何を？」

危うく了解しかけた……………。

「貴方の事よ。一応、妖怪達の味方が、否かをね」

「……………それなら構わない。もし敵だとしても幻想郷の妖怪には手を出さないだろう。多分」

「多分って……………随分と曖昧ね」

「記憶回復とその後の俺次第だからな。未来は分からないのさ」

「まあ敵対したら私達が吹き飛ばしてやるから安心するんだぜ!!」

「いや、安心出来ないよ!？」

「全くです。いざとなれば私が主を……………」

「やめて!？」

俺達はこの後も楽しく会話していた。

時を経つのも忘れて。

気がつくと空はあかね色に染まっていた。

「そろそろ私は帰るとするぜ」

魔理沙は箒に乗り、浮いた。

「ああ、またな」

「おう！！次戦う時は負けないからな！！覚悟するんだぜ！！」

「まあ、その時にはスペルを完成させて今より強いだろうな」

「ははっ。楽しみにしてるさ！！……んじゃ、またな！！」

「じゃあな」

魔理沙は箒に乗り、物凄いスピードで飛んでいった。

「主、そろそろ……」

「ああ、帰るとするか」

「また来なさいよ。どうせ暇だし」



「わかった」

「あ、そうそう。響介、もう人里に入れるようにしたから活用すると良いわ」

「了解した。これで自給自足の生活が楽になる……でも金が無い」  
せつかく人里に入れるようになったのに買うお金が無いって……  
…悲しいな。

しかし紫はとある策を教えてくれた。

「……………人里とかで仕事の手伝いでもして稼きなさい」

「まあ水姫と頑張るさ。…………それじゃ、またな」

「失礼致しちやいます」

「ええ、またね」

「しぎげんよう」

「『瞬間移動』」

俺と水姫は家へと瞬間移動した。

俺達は自宅の目の前に出現した。

「さてと……明日は色々大変だな……」

「記憶探しと仕事探しでござんすよね？」

「ああ。とりあえず俺と明日人里に向かう。可能なら水姫もついで来てくれないか？」

「ええ。私は構いません」

「よし。なら今日は早く寝て明日に備えよう」

俺と水姫は保存していた野菜と釣った魚で夕飯を済ませて、眠りについた。

「……………ん？」

気がつくとも俺は謎の空間にいた。

先が見えない程に広がって白い世界。

足元には俺が大の字になって寝れるぐらいの床がある。

そして後ろを見ると丸くて光る物が4つ、並んで浮いていた。

「なんだろ……これ」

4つの塊はそれぞれ別々の色を放っていて、その光は見る者を引き付ける。

塊の光の色は赤、紫、青、白だった。

その時！！

カツ！！

「ま、眩しっ！！」

塊は急に輝きだして、形状が変化していく。

紫の塊は銀の狼に、青い塊は黒い龍に、赤い塊は白い天使に、白い塊は赤い鳳凰の姿になった。

そして狼が喋りだした。

「……また会ったな」

聞き覚えのある声だった。

ルーミアに襲われた時に助けてくれた声だ。

「お前……もしかして銀狼？」

「ああ、そつだ。僕は銀狼。お主の妖力の源なり」

「これが俺を拾った奴か……中々な力がありそつだ」

その隣の黒い龍は俺を見ている。

龍と言っても蛇みたいな体じゃなくてレツ○アイズ・ブ○ックドラ  
○ンみみたいな感じだ。

「で、黒い龍の名前は？」

「俺の名前は黒龍<sup>くろりゅう</sup>。お前の魔力の源だ」

(名前つて……そのままなんだね……)

俺はそんな事を考えた後、黒龍の隣に視線を向ける。

そこには白くて大きな羽、金髪ロングヘア、我が儘ボディの女性  
がいた。

「で、さらに隣の人は？」

「はいはい！！私の名前は天星<sup>あまほし</sup>！！貴方の霊力の源は私よ！！」

元気な印象を与える天使だった。

「確か……取り込んだんだよな」

「そうよ。消えかけてた私を助ける為に貴方は私を取り込んだの」

「ああ……そんな感じの記憶があるような……」

一部分の靄が少しずつ晴れていくのを感じた。

「で、鳳凰は一体何？」

これは……一目瞭然だと思ふ。

「我は鳳凰……まだ力は解き放っていないが、お前の神力の源だ」

「……っていう事は……神様なのか？」

「そういう事だ」

正直俺は驚いた。

まさか神様まで取り込んでたなんて……。

「なんか俺って色々取り込んでるみたいだな……」

「でも……気にしなくて良いんじゃない？」

天星が笑顔で言った。

畜生、天星。

笑顔が兵器じゃないか……。

「……しかし何故俺はここに？」

「うむ。簡単に言うならお主の取り込んだ力を再度認識してほしかったのだ」

銀狼が説明した。

「まあ神様を取り込んでるのは驚いたもんなあ……」

「そしてもう一つ。我の力を解放する報告だ」

「力を……解放する？それって一体……」

俺が質問しようとした時、銀狼が何かを察知したように喋った。

「む……そろそろ時間のようだ」

「え？時間って？」

「貴方が起きる時間って事よ」

「何？もう朝なのか？」

「そういう事になる」

黒龍が答えた後、鳳凰が別れの言葉を言った。

そして銀狼、黒龍、天星はそれに続くように言った。

「それでは響介よ……頑張れ」

「僕達はいつでもお主の中にいる」

「……強くなれ」

「それじゃあ、まったねー!!」

それぞれが言いたい事を言ったら、目の前が光に包まれた。

目を開くと家の天井があった。

「夢?………違うか」

「おはようございましてたりします。主」

水姫が布団の横に来た。

「ああ、おはよう」

「ちなみにもうすぐ朝食です」

水姫は立ち上がり、家の裏口から出ていった。

「……さてと、今日一日頑張るとしますか!!」

俺は布団から出て、伸びをしてから水姫の後を追った。



## 第8話 人里での一日

朝食を食べて、冷たい水で顔を洗い、目を冷ました俺は今、人里に向かつて歩いている。

「人里か……あの時以来だな」

「おや？人里に行った事があるご様子で」

「ん？入ってはいない。外から見たただけだ」

「なるほど……で中の様子は？」

「人々に活気があり賑やかだった。……外の世界より良いぐらいな」

「楽しみですね」

俺は水姫と会話しながら人里へと向かった。

人里に着くと俺は周りを見渡した。

理由はどんな店があるのか気になったからだ。

それともう一つ。

以前、人里の前に居た女性がいるかを確認しなかった。

あの人なら人里に詳しいそうだしな。

「まあ大通りを進めば見つかるだろうな」

「それにしても賑やかですね。ここは」

「ああ、とても楽しそうだ」

大通りは店で商品を売る声、買う者の声、笑い声等……色々と賑わっていた。

外の世界だと、こういう光景は中々見れない。

そんな活気の中で俺は考え込んだ。

「さて、どうするか……」

「どうしたんですか？主」

「いや、人里に詳しい人がいたら楽だなんて……」

「ん？君はあの時の……」

水姫に説明しようとしたら聞いた事のある女性の声が聞こえた。

「あ、居た。人里に詳しい人」

「名前で呼ばな……ああ自己紹介して無かったな。私は上白沢 慧音。この里で教師をしている」

「俺は風戸 響介」

「私は水姫です」

自己紹介を簡単に済ませて、本題に入る事にした。

まあ水姫に喋らせるけど。

「あの、慧音殿に頼みがありんして……」

「ん？なんだ？」

「人里を案内して欲しいのでござんす」

「任せてくれ。しっかりと案内してやるっ」

よし、これで大丈夫だな。

一応保険もかけておこう。

「……水姫」

「はい。なんでしょう？主」

「店の場所とかをメモしておけ」

「かしこまっちゃいました」

（これで安心だな。）

俺は水姫に色々と任せて、ゆったりとついていく事にした。

「それじゃあついて来てくれ」

「おう」

「了解しちゃいました」

俺達は慧音さんについて行った。

ちなみに慧音さんは水姫が気になっていたらしく色々と聞かれた。

全ての案内が終わり、今は茶屋で休憩中だ。

「いやあここは賑やかで良いなあ〜」

「同感です」

「ここを気に入ってもらえて嬉しいよ」

みんなで団子を食べながら会話する。

すると向こうから子供達が走ってきた。

「」「慧音せんせーい!!」「」

「おお、お前達か」

慧音さんは子供達に手を振る。

「生徒さんですか?」

「ああ、元気な教え子だ」

子供達は近づいてくると俺と水姫が気になったらしく直球ストレートに質問してきた。

「あれ?お兄さん達誰?」

「ん？俺か？俺は風戸 響介だ。よろしくな」

「私は水姫です。よろしくお願ひしますね」

あれ？水姫が普通に敬語が喋れてる？

何故？

「それでお兄さん達は何しに来たの？」

「私達、遠いところから引越して来たんです」

「それで慧音さんにここの案内して貰ってたんだ」

正直、水姫のは嘘に近いが……………問題無いだろうな。

しかし……………喋り方でここまで雰囲気変わるのか……………。

「慧音先生って良い人でしょ？」

「ええ、とても良い人です」

「こんな人が先生だなんてうらやましいな」

「……へへへ」

子供達は笑顔だ。

なんかこういうのを見ると和むなあ……………。

そんな時、俺は面白い事を思いついた。

「あ、そうだ。ここで会ったも何かの縁。一つ面白い物を見せてやろう」

「「「え？何々？」「」」

「水姫。何か球とか無いか？」

「ありますよ。確か……小さめの鞠が一つ」

「何で持つてるんだよ……まあ良いや」

俺は突っ込みを入れつつ、鞠を受け取る。

鞠の大きさはバレーボールくらいだ。

「それと桶無いかな？」

「ならこれを使うかい？」

「ありがとうございます。少しだけお借りしますね」

茶屋のおばあちゃんが貸してくれた。

この桶はバケツみたいな感じだった。

ただし持ち手はついてない。

「さて……この鞆と桶を使って手品をしようと思っ」

「ねえ、どんな手品なの？」

「見てれば分かるよ。まずは桶の中に鞆を入れるんだ」

子供達は目を輝かせて見ている。

「そしてこの桶に布を被せる。……そうだな。その少年、この桶を持っててくれないか？」

「え？うん、わかった」

俺は少年に桶を持たせた。

「君達で布を押さえててくれ。力強く、でも布が破けない程度にな」

「「えいつ!!」」

子供達は頑張つて布を押さえている。

「それじゃあ……3・2・1・0!!」

俺は1と数えた時に左手を翳した。

そして0と数えたら右手の指を鳴らす。

「さあ、その布を退けてごらん？」

「うん……あれ？鞆が無い!？」



「どうだ！！これが”瞬間移動”だ！！」

この台詞を聞いたら分かるだろう。

もちろんタネもな。

子供達は「どうやったの!?」とか「スゲー!!」とか言っていた。

どっちら言ってくれたようだ。

いや〜和むなあ〜。

「あ、ちなみに鞆を出す事も出来るよ?」

「」「」「」出して出して〜!!」「」「」

「んじゃ出しますか」

俺は子供達の期待に応えるため、鞆を出す事にした。

「それじゃあ、まずは桶を裏返して地面に置く」

「」「」「うんうん」「」

「そして君達が上から壊れないように押さえる」

子供達は桶を押さえた。

「それじゃあ行くよ。3・2・1・0!!」

また左手を翳して、右手の指を鳴らした。

「さあ桶をどけると良い」

子供達は桶をどけた。

するとそこには鞠があった。

「「「スゲー!!」「」」

子供達は凄く喜んでくれたようだ。

「「「それじゃあまたね〜!」「」」

「またな〜」

そして子供達は帰っていった。

「響介……君は凄いな。あんな手品が出来るなんて……」

「俺からしたらかなり簡単ですよ？技を使っただけですし」

「まあ……そうですね。手品の名前を言った時点でわかってました」

「ん？話の内容が掴めないんだが……」

「俺は瞬間移動って技があつて……」

この後、技の説明からタネ明かしまでを人里の出口に向かいながら説明した。

「どうです？わかりました？」

「ああ、理解したよ。しかし興味深い……………」

慧音さんは何か考え込んでいた。

「あ、もう出口か」

「そうですね……………あ、主。あの件について聞いた方が……………」

「そうだな。……………慧音さん。一つ良いですか？」

「ん？なんだ？」

「ここでバイトとか無いですか？」

「どうした？いきなりバイトなんて……………」

まあ普通、そういう反応だよな。

「いや、こっちの通貨とかを持って無いから稼ごうかと……」

「なるほどな……わかった。探しておこう」

「そうしてくれるとありがたいです」

よし、これでお金はしばらくすれば大丈夫だな。

とりあえずしばらくは何とか魚とか山菜を食べて過ごすか。

「それじゃあ俺達は帰ります」

「ああ、わかった。それじゃあ、またな」

「失礼致しちやいます」

俺と水姫は人里から出て、家に向かって歩きだした。

## 第9話 青年の悩み事？

歩いてる内に夜の帳が下りてきてしまった。

「少し急ぐか……」

「そうですね」

俺は歩く速度を速めた。

そんな時、草の茂みの中から何かが飛んできた。

「危なっ！！」

俺はとつさに神槍を出して、飛んできた物を弾いた。

「主、大丈夫ですか？」

「ああ、しかし今のは一体……？」

そんな事を言っているとまた何かが飛んできた。

「はあっ！！」

今度は水姫が防いだ。

そして俺は槍を構えて、茂みに向かって言った。

「さて、姿を見せて貰おうか」

「……また会ったわね」

茂みから出てきたのはルーミアだった。

それともう一人。

「この人なの？ルーミア」

「誰だ？」

「私はミスティア・ローレライ。ルーミアの友達よ」

「へえ……よろしくな」

とりあえずいつも通りに振る舞った。

「主、知り合いですか？」

「お前と会う前、金髪少女の方に喰われそうになった」

「……主を襲うなんて不屈き千万！！成敗してくれます！！」

なんかやる気出してるとよ……この子。

「で、戦うつもりなのか？」

「ええ、もちろん。あの時の復讐をするわ」

「貴方を闇の恐怖に取り込んでるあげる！！」

二人ともやる気だな。

なら俺も参加するのでしょうか。

「格闘戦をしようか」

「別に構わないわ」

「私も」

「主に従うのみです」

決定だな。

「水姫、守りからスキをつくぞ」

「かしこまっちゃいました。主」

「ミステイ。あれをやるわよ」

「うん、わかったわ」

弾幕ごっこが始まった。

「さあ、闇に飲み込まれるが良いわ!!」

ルーミアが闇を作りだし、俺達を飲み込んだ。

そして格闘を仕掛けてきた。

「目が慣れれば見えるはず……」

「それまで耐えましょう」

俺と水姫は格闘の直撃を避けながら、耐えた。

そして闇に目が慣れてきた。

「よし、これで何とかなる」

「そんなに甘くないわよ!!」

ミスティアがそう言った瞬間、慣れていた目が見えなくなってしまうた。

正確に言えば、微かに見えていた光が見えなくなってしまったのだ。

「また見えなくなった……」

「何なんでやがるか!!」

俺達がそんな事を言っているとミスティアとルーミアの声が聞こえた。

「私は人を鳥目に出来るの」

「そしてこれが私達のコンビネーションよ!!」

このルーミアの台詞と同時にまた攻撃が始まった。



「クッ!！」

「きゃっ!！」

闇の中で爪のような斬撃が舞う。

俺達はしばらくの間、闇に翻弄されて何も出来ずにいた。

一時的に攻撃が止んだ。

「はぁ……はぁ……。水姫、無事か？」

「ええ、……主こそ大丈夫ですか？」

「意外と……マズイかもな」

俺はここで打開策を探すため考え込んだ。

「水姫。お前って力を感知する事って出来るか？」

「まだ完全に感知出来るわけではありませんが……」

「周囲20m以内ならどのくらい精度が上がる？」

「大体……素早い動きの物体を3個捕らえるくらいですな」

「それぐらい出来れば充分だ。良いか？まず……」

俺は水姫に耳打ちした。

打開策を伝えるために。

「出来るな？」

「もちろんでございます」

「よし、ならば背中合わせで行くぞ」

「かしこまっちゃいました」

俺と水姫は背中を合わせた。

「どんなに策を練ったところで……」

「私達に勝てるわけがない……」

闇の何処かから声が聞こえてきた。

「……………水姫」

「はい、3と7……………4と8……………5と9……………」

「『サイキック・インパクト・ブラスター』」

俺は技の構えをした。

例えるならば○はめ波みたいな構えだ。

しかし放つ訳では無い。

しっかりと狙わないと駄目だからな。

「7と11……………8と12……………」

水姫のタイミングに合わせる。

そしてその時が来た。

「11と3!!」

「発射あああ!!」

俺は真つ正面に極太ビームを放った。

「きゃあああ!!」

誰かに当たったようだ。

声からしてミステリアだ。

「水姫!!」

「かしこまっちゃいました!! 『迅雷・時雨の型』!!」

水姫は双牙を取り出し、周囲20m以内を切り裂いた。

「くっ!!」

「きゃあ!!」

今度は二人当たったようだ。

まあ避けるにしても、『迅雷・時雨の型』は斬撃速度が速いから避けにくいんだよな。

「お、闇が消えた」

「作戦成功でござんすな」

「やっぱり強い……!!」

「ここまでやられるなんて……!!」

ルーミアとミステリアは損傷を負いつつも戦闘態勢だ。

「もうやめておけ。もう傷付けたくない」

俺はそう言って、戦いを止めようとした。

しかし、

「せめて一太刀!!」

とルーミアが斬りかかってきた。

「はあ……」せめて一太刀”ねえ……」

俺はルーミアの剣を槍で受け止めた。

そして弾き飛ばした。

「くうっ!!」

ズザアア!!

「ルーミア!!」

ミスティアがルーミアに駆け寄った。

「水姫、二人を治療してやってくれ」

「よろしいのですか?」

「構わない。怪我を治してやってくれ」

「かしこまっちゃいました」

水姫は二人に駆け寄り、治療した。

「……水姫に頼ってばかりだな……強くなりたい……」

俺は夜空を見ながら呟いた。

正直、頼るのは良い事だと思う。

しかし俺には抵抗がある。

抵抗がある理由は頼る事に恐怖があるからだ。

頼り過ぎて、誰かの足を引っ張るのが怖い。

頼るばかりで自分が弱体化しそうで怖い。

そしていつか、俺はいらぬ存在になってしまうのが怖いのだ。

だから余り頼るような事はしたくない。

「主、治療が終わりました」

「……ああ、ありがとう」

「どうかしやがりましたか？元気が無いようでございますが……」

「いや、なんでもない」

「？……それなら良いのですが……」

水姫には情けない姿を見せられない。

情けない姿を見せたら、俺のところから離れていくかもしれない…。

「……………帰るか。腹減ったし……………」

「かしこまっちゃいました。主」

「また……………会いましょう」

「今度は負けないからね!!」

俺と水姫はルーミア&ミスティアと別れて自宅に向かった。

家に着いた頃には星がくつきり見えるぐらいになっていた。

「さてと夕飯はどうするかな?」

「山菜ならあります。あとお米も」

「なら、今日はそれで乗り切るとするか」

「あとなしの辛抱でございますからな」

とりあえず夕飯決定。

「よし、作ってきてくれ」

「かしこまっちゃいました」

水姫は川へ向かった。

俺は一回、家の中に入った。

そして床に座り、考える。

（力を察知する技か……どうやるんだろ……）

まあ考える内容は水姫が使った技だったりする。

力を察知することが出来れば、強い相手に気づかれる前に逃げる事が出来る。

（水姫にやり方でも教えてもらおうか）

俺は水姫に頼る事にした。

抵抗はあるが、自らが強くなるなら我慢する。

そして……自分だけでは無く、仲間を守れるようになる為だ。



(絶対に……家族は守るんだ)

そんな決心を俺は固めた。

するとナイスタイミングで水姫が

「夕飯出来ましたでございますです!!」

と言ったのが聞こえた。

「腹ごしらえして今日は寝るとしよっ」

俺は河原へ向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1395u/>

---

東方生活録

2011年11月10日08時03分発行